



地域という言葉から身近に思い浮かぶのは、自分が住んでいる市町村、それとも参加している自治会や子供の通う小中学校だろうか。地域は人の年齢や職業、あるいは目的によっても変化する空間的まとまりの概念である。そんな地域を冠にした「地域学」が各地で展開している。例えば「金沢学」や「山形学」など、現在の自治体名にもなるような共通認識のある呼称が

地域学 再考

地域に学ぶ大学 地域を担う人材の環流



名古屋経済大学経済学部准教授
佐藤 正之

使われることが多いのだが、この地域学、明治期の「沖縄学」がはじまりともいわれている。戦後の公民館活動などが源で、「地方の時代」に自治体を起点とした「掛川学」や、「気づ

まこと・まさゆき 地理学。愛知大学大学院修士課程修了。1971年生まれ。

き」や「あるもの探し」で地域理解を深める水俣の地元学まで、主体や手法はさまざまだが、地域に学ぶ、地域づくりを実践する、地域課題に取り組むといった活動が地域学の立ち位置だろう。

一方20年ほど前まで、大学で地域という名称のつく学部・学科はわずかであった。しかし阪神淡路大震災や平成の市町村合併など、これまでになかった課題への対処が注目される中、大学に地域連携や地域協働という看板が掲げられ、今では地域を冠する学部・学科は国公立大学も含め70以

るが、それは学生にとってこの「場」が、単なる作業体験や突飛な意見提示で終わるものではなく自ら継続した取り組みが可能で、より深く地域を理解する貴重な機会となるからだ。

例えば地域の安全やまちづくりなど実際の地域課題に共同で取り組むと、その「場」から現実的な指摘をいくつも受けることになり。その指摘を踏まえて地域課題への対処や施策が提案できれば大きな成果だが、仮にそこに到らずとも、例えば、学生のインターンシップへの意識変化や、NPOへの参加や立ち上げにまで波及するなど、「場」

での経験は次につながっていく。同時に地域学の「場」にも共同の経験が蓄積され、人材醸成の場としての展開も期待できる。

本学でも、地域学を意識した組織として犬山学研究所センターが新たに設置された。ここではさまざまな主体が各々の地域でテーマや活動を設定し、共同で「犬山学」に取り組むことができる。同時に本学の日本人学生、留学生、社会人学生により深い地域理解の場にもなるだろう。もちろん大学組織として、地域性を考慮しつつ継続的に関わることも前提であるが、こうした連携や共同による活動の「場」と「人材」が、地域への視座を持ち合わせた人の環流につながっていくことを期待したい。

上、地域に関わる機関もそれ以上の大学に設置されている。地域課題に対応する体制が大学にも整ったようにも見え、定住自立や地域おこしといった国の地方創生の動きもあって、地域学が新たな局面を迎えているといえる。

大学が地域学に関わる術は研究と教育が中心となるが、研究ではフィールドワークや参与観察など既存の学問分野の蓄積もあり、地域を知る手法は大きく変わらないう。教育では、地域学を学習・実践の「場」として位置づける傾向にあ

るが、それは学生にとってこの「場」が、単なる作業体験や突飛な意見提示で終わるものではなく自ら継続した取り組みが可能で、より深く地域を理解する貴重な機会となるからだ。

例えば地域の安全やまちづくりなど実際の地域課題に共同で取り組むと、その「場」から現実的な指摘をいくつも受けることになり。その指摘を踏まえて地域課題への対処や施策が提案できれば大きな成果だが、仮にそこに到らずとも、例えば、学生のインターンシップへの意識変化や、NPOへの参加や立ち上げにまで波及するなど、「場」

